

I 元禄潜穴

4 元禄潜穴をめぐる悲話

① 大越喜右衛門とその部下たち

元禄 11 (1698 年) 年 8 月 15 日、仙台藩の直轄工事として進められていた元禄潜穴や排水路の工事が完成した。その落成式には、大きな期待を寄せ待ち望んでいた藩主伊達綱村が臨場することになっていた。ところが、前日の夜半から暴風雨となり、15 日朝には品井沼一面が増水。工事の総指揮をとっていた大越喜右衛門は、これでは排水の現場をよく見ることができないだけでなく、藩主の身に危険が及びかねないと考えた。現場の諸役人や地元村方一同が相談し、臨場は後日に行ってもらうことを決め、仙台城に急使を走らせた。しかし、早馬が仙台城下の大橋に着いた時には、すでに藩主一行は橋の中央にまで進んでしまっていた。とにもかくにも臨場は後日に変更になり、地元は一応安堵したが、おとがめが必ずある、殿様を惑わした罪は重いと大騒ぎになった。

こうした事態を受け、大越喜右衛門は、藩命を待たずに、その責任をとって品井沼を一望に見下ろす丘で自刃。部下の技術者 6 名もその後を追って果てたのである。

後難を恐れてか 7 つの屍は野ざらしのまま幾日か放置されたが、やがて付近の人々の手で埋葬された。

7 つの土まんじゅうが草むらの中にある。松島町上幡谷地内、現在の「長松園」の一番高い所のその場所を、いつしか人々は「お墓山」と呼ぶようになった。

また里人は、大越喜右衛門を偲び、次のような地口（地唄）を唄ったという。

品井沼かすかにみたか いとおしや 大声（大越・おおごえ）あげて 泣くぞ喜右工門

大越家は、大越勘解由助が先祖で、延暦二十二年（803 年）坂上田村麻呂が東夷征服のために東北地方に遠征したとき、勘解由助も参加した。当時、田村勘解由助といったが、声が高かったことから通称「大声」と呼ばれた。その後、田村麻呂から大越の姓を許されたと推察される（大越家緒書より）。

系図によれば、大越紀伊守顕近は、田村郡大越城主で伊達政宗が会津の芦名氏と戦ったとき、紀伊守は政宗に大越城を明け渡した。続いて紀伊守の長子右衛門が大越城を再興し、城主になるとともに政宗の家臣になっている。

豊臣秀吉による奥州仕置により、政宗の会津攻めが秀吉が出した惣無事令に違反していたこと、政宗自身が小田原に遅参したことなどから、政宗は米沢（現山形県）から岩出山（現宮城県大崎市）に国替えとなった。このとき、大越若狭守常近（後に源兵衛と改名）もこれにしたがった。

政宗が仙台に移った頃、大越家は紀伊守源兵衛の長子善右衛門に変わり、その子伊右衛

門の代となっていた。伊右衛門には男子がなく二女に完戸半右衛門重成の三男喜右衛門を婿に迎え跡目を継がせた。この大越喜右衛門が技術者で元禄潜穴の総指揮者に任命された。

大越家は、幕末まで続き文化年代には大越清之進盛近が宮城郡竹谷村六番地に住んでいた。子孫は竹谷に明治初期までおり、その後鹿島台町平渡字並柳に移住し現在に至っている。



▲お墓山にある大越喜右衛門の墓とされる場所
(右側のお地藏様の土まんじゅう)

2010_08_01 撮影

▼鹿島台町史で紹介されていた画像



大越喜右衛門の墓
(地藏の下の土饅頭がそれであるといわれている)

画像出典：鹿島台町史